

味合いもこの名称には込められていきます。

日本における障害者のスポーツというのは、まだまだリハビリテーションの延長という考え方も強く、行政の管轄も厚生労働省(一般にスポーツは文部科学省)にあります。それが欧米諸国等では、スポーツ省(庁)と言うような省庁が健常者や障害者も含め、全ての人たちのスポーツ振興を担っています。やつと日本でも、日本体育協会の中に「日本障害者スポーツ協会」が加盟をいたしましたし、大阪市体育協会にも我々の組織である「大阪市障害者福祉・スポーツ協会」が加盟をしました。つまり、障害者のスポーツが特別なスポーツという意識ではなく、同じスポーツとして、リハビリテーションから競技スポーツまで幅広く発展しています。



### 三、障害者のスポーツの可能性

#### 可能性

私は、もつと社会に対して、障害者のスポーツの楽しさや素晴らしさ、可能性を伝えていく必要があると思っています。例えば、足の不自由な人も車椅子に乗れば激しい車椅子バスケットボールができます。一〇〇メートル走でも義足で一〇秒台で走ります。健常者の世界記録に一秒違うか違わない程度です。これから義足や車椅子の軽量化や技術進歩がさらに進めば、記録が逆転してしまう可能性もあります。そんな素晴らしい場面に出会うことを通して「でも、どうしてあの選手は車椅子に乗っているんだろう」と考えることが、人に優しい町づくりに、やがては、障害者に対する理解や障害者雇用にも繋がると信じています。

パラリンピックの創始者 Dr. Sir L. Guttmannが「失った機能を数える

な、残った機能を最大限に生かせ」という言葉を残しています。この言葉の意味は、私たちに「何ができないかではなく、何ができるか」に視点を向けることが、大切であると教えてくれています。障害者理解への糸口として、また、教育的可能性を探る手段として、障害者のスポーツの果たす役割は大きく、その可能性はますます広まると考えています。

#### 第9回全国障害者スポーツ大会トキめき新潟大会報告

平成二十一年十月十日(土)から十二日(月)までの三日間にわたり、全国障害者スポーツ大会「トキめき新潟大会」が開催されました。

大阪市からは役員三十四名、選手八十三名の総勢百十七名の選手団が参加しています。各競技とも選手・役員が一つとなって大会に臨み、大阪市

選手団としては金メダル二十九個、銀メダル二十個、銅メダル十二個という素晴らしい結果を残しました。また、メダルを獲得できなかった選手も、精一杯自分の力を出し切り、清々しい表情で大会を終えました。

帰阪して長居障害者スポーツセンターで報告・解団式が催されましたが、既に来年の千葉開催に向けて気持ちを新たにされている方もいました。スポーツを通じて日々の活力にされる姿に、私たちも何か少しでも力添え出来ればと思います。

【事務局員 木下 智之】

#### 第十三回近畿手をつなぐ育成会リーダー養成研修会に参加して

学齢期部 長谷川美智代

秋爽やかな十月一日(木)神戸市育成会会館にて、近畿手をつなぐ育成会リーダー養成

研修会が行われました。大阪市育成会からは、笹野井理事長をはじめ、学齢期部の若い保護者を中心に十七人が参加しました。

今回は、『学びあい、私らしく活きるための家族支援を我が地域で!』をメインテーマに午前中は全日本手をつなぐ育成会理事長の副島宏克様より中央情勢報告、午後からは、家族支援プロジェクトの学習会という内容でした。

新政権が誕生し、自立支援法が廃止となり、直接影響を受ける福祉施策がどう変わるのか。問題が法律のことになると、その内容を理解するのに頭が痛いのですが、全日本育成会の副島理事長のお話は、様々な資料をもとに、障害者自立支援法の行き先、障害者虐待防止法の審議中止、障害基礎年金の減額事例、安心社会実現会議への障害者の参画等々について具体的に説明して下さったので、とても分か